

平成27年度 熊本市食の安全安心・食育推進会議 食育推進部会

開催日時 平成27年10月14日(水) 10:00~12:00

場所 熊本市役所議会棟2階 議運・理事会室

出席委員 9名(五十音順・敬称略)

(加来 佑佳子、亀井 万紀子、川瀬 修一、小山 和作、
田上 あつみ、田中 眞知子、馬場 哲也、平川 恵子、藤本 愛英)

次第 1 開会

2 議題

- (1) 市民アンケート調査の結果について
- (2) 熊本市食の安全安心食育推進計画中間評価について
- (3) その他

3 閉会

《事務局》

資料説明

《田中会長》

では議題1の資料についてご意見やお気づきになった点などを順番にお願いしたい。

《川瀬委員》

24年度から27年度で上がっている数値下がっている数値とあるが健康保険組合としては年間10から12回のセミナーをやっている。保健師、管理栄養士、運動指導士でタッグを組んで行っているなかで管理栄養士から食生活について色々お話がある。その中でも特に小さい子どもから色々教えていかないと学生、社会人になってからはなかなか結果に出てこない。やはり小さいときからの食生活が一番大事ではないかと思う。そこで去年から夏休みに親子セミナーをやっていて今年も8月に35名参加されていてその中にはおばあちゃんもいらっしやっていた。おばあちゃんがいる家族は朝食をちゃんと摂っているし夕食も一緒に摂っているところが多いように感じた。とくにお父さんとの食事はなかなか時間帯が合わないとかいったアンケート結果も出ているが地道にやっていこうかと思っている。日赤健康管理センターの協力を得ながら続けていきたいと思う。

《田中会長》

大きくなってからは分かっているけどなかなか実践に結びつかない。周知から実践へという働きかけをしようということだが大人の場合そこまでの距離が遠く、子どもの場合は体にしみこみやすい。親子セミナーの中で3世代のところは、親が忙しくてもおじいちゃんおばあちゃんがバックアップしてくれていてそれも非常に重要なことではないかと思う。市

の健康フェアでも親と子という組み合わせだけではなくおじいちゃんおばあちゃんと孫という組み合わせの方がいいのかとも思う。

《田上委員》

子どものときからというのはとても大事なことで、このアンケートの中にも出てくるが30代40代の方というのは乳幼児のお父さんお母さん世代になり、学校・保育所・幼稚園における食育推進の部分で子どものみではなく子どもと親という形で持っていくということが一石二鳥の方法ではないかと思う。食育の啓発は学校としての割合が大きいと思うがどこまでできているのかというのは定かではない。ここをしっかりとやっていくことで今後内蔵脂肪症候群の予防にもつながってくるのではないかと思っている。

また栄養士会主催で子どもと高齢者のふれあい食事会というものをやっている。熊本県下2つの施設でさせてもらっているがその中でもっと食べた方がいいとか残したらいけないといったような孫とおじいちゃんおばあちゃんとの交流もあっているので、そういったところでも家族での食育活動というものもとても大切なことではないかと感じた。またそこに食改さんが地域で地道にやってらっしゃる活動が反映されるともっと良いのではないかと期待しているところである。

《平川委員》

食育ネットワークからではないかと思っている。保育園や幼稚園の朝食を食べる割合が上がってきているのはそういった取り組みがあるからではないだろうか。またゴミ減量についても活動している割には下がってきているなということを感じた。郷土料理については食改さんが第二高校で10クラスくらい毎年授業でやっていて他の学校でもこういったことが行われるといいのではないか。なかなか私たちの方から入るのは難しいと思う。

《藤本委員》

私も小学校6年生の子どもがいるが、特に夕食の時間帯は塾に行っているお子さんもいるし習い事やスポーツをされているお子さんも増えている。また部活動をされていて親が送迎をしなければいけないという事も多くて、やりたくてもどうしても食に対して手をかける時間が少なくなってしまうという現状もあるのではないかと実感している。アンケート結果を拝見していて36ページの“あなたは栄養や食事・食品に関する正しい知識や情報を得ようと努めていますか”というところで、どちらかといえば努力しているという方が半数近いという結果を見て、やはり関心はあるけれどなかなか手がかけられないという状況があるのではないかという感じがした。また、“あなたは食生活や食品に関してどのような情報が欲しいですか”という質問で“調理方法（レシピ）”というのがダントツで半数近くを占めているのでこういった情報を得られる機会を行政の方から示していただくと親御さん方も料理に関する関心をもっと高まるのではないかと思っている。実際給食だよりも配布されているが見ている親がどれだけいらっしゃるのかということも感じたところである。保育園・幼稚園・小学校・中学校からの食体験は大切だというお話だったが正にそう感じていて保護者会や授業参観などの学校行事の中で年に何回かでも一緒に何か作っ

たり調理イベントなどを組み入れていただける機会を増やしていただけるといいのかなと感じている。

《小山委員》

一生懸命やっている割に成果が上がらないという気がする。中学生の朝食の欠食が多くなっているということだが、たとえ朝ごはんを食べているといってもその中身が大事だと思う。何を食べるかによって違ってくる。また、外食の中でも健康づくりできます店はまだこれからで、浸透するには5年くらいかかるというお話があったが、その通りだと思う。この資料を見ると外食するのはファミリーレストランと回転寿司でその二つがダントツが多い。ファミリーレストランはほとんどが全国チェーンで、食材というのは全国で作って冷凍食品で持ってきてそれに火をいれて調理するというもので、本当にそれでいいのかなと思う。見かけや味はずいぶん工夫してあるが、健康づくりできます店としてはほど遠いのではないだろうか。

また農林漁業体験のところが減っているということだが、今は分化の時代でサラリーマンはその仕事を一生懸命していて、その他の流通関係、メーカー、情報関係などそれぞれ忙しい。農林漁業体験をする時間もないし、それをするよりも子どもに対して一生懸命勉強して収入をあげれば何でも買えるといったような教育をしているような流れが世の中にあるのではないだろうか。これは農家自体に対しても言えることだがみかん農家はみかんだけ作っていて野菜は作っていない。そういったところの人たちは野菜の作り方も知らない。農業自体も分業化している。

医者の世界でも同じで、内科というものは何でもしなければいけなかった。内科はすべての根幹だったので皮膚科や泌尿器科、婦人科まで全部やっていた。しかし今は違っていて内科の中でも10くらいに分かれていて、全てがそういった方向になっていっている気がする。そうなる则ち他のものに関心がなくなってくる。

農林漁業体験を経験した市民の割合が減っているというのもやり方の問題があるのではないだろうかと感じた。

郷土料理というのは健康食づくりであると思うが、今の人たちがだんだん現代食に舌が慣れてきていると思う。子どもたちが美味しかったと思うような郷土料理を作らないといけない。親御さんがそういった味を受け継いでいないので郷土料理に対してあまりおいしいという印象を受けていないと思う。更にその子どもたちはどうだろうか。郷土料理を美味しいと思うのは戦中戦前の人間だけでそれ以降の人たちは郷土料理の良さというものがわからなくなっているのではないだろうか。郷土料理の必要性を押しつけてそれが本当に進んでいくのだろうかと思う。

《田中会長》

私も百姓を自認しているのだが、小豆を採り、干してより分けるという非常に大変な作業をして近所の方にお話ししたら、売ってくださいと言われた。しかし差し上げることはできても売ることにはできないと申し上げた。農業というのはお金の問題ではないと常々思っ

ていて、田舎では物々交換が行われている。作った苦勞が分かる人同士で交換するというのは作る側だから分かることであって、サラリーマンの方にはなかなか分からないだろうと思う。そういった体験ができない状況に子どもがあるというのももどかしいし、そこにどうやったら力を貸せるのかということも課題として考えていかないといけないと思う。

《亀井委員》

先程から家庭構成によってずいぶん食生活が違ふということで、おじいちゃんおばあちゃんが子育てになっているところは食材が豊かであると思う。幼稚園でのお弁当の日に見てみると今はキャラ弁に力を入れていらっしゃる。まずは何分も見てから食べ始めるのだが、食べにくそうにしている。親御さんが忙しいところはおばあちゃんが作って持ってこられるが、茶系が多いのだがその子たちを見ていると里芋の煮メなど抵抗なく食べている。今のお母さんたちは雑誌に出てくるようなお弁当が出てくるので偏りがあるとは思いますが、開けたときの子どもたちの喜びがつながっていけばいいのかなと思う。

おじいちゃんおばあちゃんがお育てのところの子どもは冷凍のものが少なく、お母さんのを見るとカップに入ってチンしたようなものが多い。子どもたちが完食するまで先生たちがチェックして何分もかかるという姿も見られるが、給食などで子どもたちが残しても親御さんがうちはもう食べさせなくていいですと最初からあきらめられている様子が見られる。人参やピーマンなどの緑黄色野菜は苦手な子どもが多いのでお誕生日会の時に職員がピーマンマンや人参マンなどに変装して大好きにさせるように工夫をしている。各幼稚園そういった活動をそれぞれしていらっしゃると思う。

また季節も感じられるようにということで季節のフルーツを取り入れていらっしゃる。

次に、食育の推進に関わるボランティアの数が順調に増加してますという事だったがどういったボランティアの活動をされているのかということをお聞かせいただきたいと思う。

《事務局》

食生活改善推進員と8020推進員の2つの食育ボランティアについて載せているが、主に食生活改善推進員については市からの委託事業として94小学校区で料理教室をしていただいている、うちで毎年作っているバランスガイドに則したようなメニューの食事を料理教室で行っている。またごみ減量推進課の方でエコレシピというものを作っていてその普及も行っている。また国からの委託事業で、各家庭を回っておみそ汁の塩分濃度を計るというような活動もされている。

《平川委員》

あとは幼稚園から依頼があれば親子料理教室をやっているし、高齢者のいきいきサロンの方でも頼まれれば料理教室を行っている。ほかにも食材さえ用意いただければこちらから出向いて料理の指導を行っている。

《馬場委員》

項目の6番の“授業参観・懇談会等で保護者へ食育の啓発を行った学校の割合”のポイントが下がったということだが、保護者への食育の啓発は何らかの形で各小学校・中学校行

われていると思う。この設問の言葉自体、授業参観というものが先に来ているのでそこに特化すると下がっているのかなと考察している。保護者への食育の啓発は確実に各学校で行われているので、学校の先生が調査項目に答えられるときに授業参観でしていないのでしていないと回答されたのではと推測される。※印にあるようにいろんな形で啓発を行っているが収穫祭等様々な機会ということで、本校でも昨日就学時検診があったのだがそのような機会も捉えて食育についての説明を栄養職員の方から行い、養護教諭からは保健指導を行った。快食快便ということで快便につながるように朝食の大切さを説明し取り組んでいければと思う。

また各学年親子レクレーションを行っていてうちの学校では5年生が例年公民館で食改さんに来ていただき料理教室をしているが、各学校でもそういった活動を行っていると思うのでそういった機会を捉えて推進できれば良いと思う。

次に設問の15番の“学校給食における地元農産物を使用する品目数”については品目が増えて推進傾向にある。先月末に11月の学校給食の物資選定委員会に参加させていただいたのだが保護者の代表や栄養関係職員の代表の方もいらっしやっていた。その際にもやはり地元産かどうかということも選定のポイントになっていて学校給食会が中心になっていて良い方向に進んでいるのだなと感じた。

先程河内の話が出たがやはり7～8割はみかん農家や海苔、イチゴ、メロンを作っている。5年生の児童がJAの御協力で毎年田植えと稲刈りをさせていただいているのだが、初めて稲刈りをするという子どもが結構多い。河内では多角的経営で農家の方が輪番でされているということで、自分のところの田んぼで田植えや稲刈りをすることはできないが、学校としてはそういった体験を多くさせて日々の給食の時間に食育の推進をやっていくということが大事ではないかと改めて思った。

《田中会長》

事務局にお尋ねしたいのだが“授業参観・懇談会等で保護者へ食育の啓発を行った学校の割合”の“等”の部分少し広げていただき、親子の試食会など実際顔を向けあって何かをした時を含むような設問に変えていただく事は可能だろうか。

《事務局》

アンケートをもとにこの成果指標を出していてこの計画は平成30年度まで毎年見ていくことになるのだが、質問は当初策定したままでいくので誤解が生じないような形で説明することが必要だと思う。今回も枠内は変更することはできなかったのも欄外でご理解いただけるよう次の計画についてはそのような点もきちんと考えた上で実態にあった指標になるよう取り組んで参りたいと考えている。

《田中会長》

最初から続いているものなので簡単に変えることはできないと思うが、第3次計画となったときには是非考慮していただきたい。

《加来委員》

私は職業柄高齢者の方と関わる事が大半で、今までのお話で祖父母と一緒に住まいのお子さんは食事が身についているという印象があるということだったが、個別に訪問させていただくと皆さんおもてなしをしてくださる。ご自分で作られたもの、採れたものを簡単に調理されているのだが、高齢者の方たちの中でもそういった印象があるのか、「あなたたちくらいの年齢だとこういったものは食べないんじゃないか」といったことをおっしゃったりする。お孫さんと3世代で住まれているところも少ないということもあるが、お正月やお盆などお会いされる機会もあると思うのでそういったときに作られたものを是非お孫さんにも伝えてくださいということをお孫さんたちの立場として直接お伝えできれば食育が広まっていくのではないかと思った。

またアンケート13ページ9番で運動習慣の定着化を図る為に情報を集約するというものがあるが、私たちはどうしても予防という事で動いているので介護予防といった面で高齢者の方に運動のできる場所を紹介したりしている。そういった講座なども紹介しているのだが、全然知らなかったという声をよく聞く。どこを見たら情報があるのか分からないという方が多いのかなという印象を受けた。高齢者に関する相談で若い方がお見えになるがどこに情報があるのかという発言を地域の方から聞くのでそういった情報を集約しているのがどこなのかということを広めていく必要があるのではないかと思った。マラソンやウォーキングなどの情報を集約されてお示しされたいとのことだったので是非お願いしたいと思った。

《田中会長》

熊本市の情報はホームページ以外で市政だよりのあるということだが来ても見ない方が多いのではないだろうか。

《事務局》

情報発信についてはホームページや市政だよりの他に、イベントを行うときにチラシを作ったり地域の回覧板を活用させていただいたりしている。ここに書いてある集約した情報発信というのは、例えばまさにその言葉でないと拾えないものではなく、すこし曖昧な形で集約することができればいいと思っている。

《田中会長》

高齢者の方でもITを使う方もいらっしゃるし、そうでない方もいらっしゃるの両方していかないといけないと思っている。

市民アンケートの速報値の資料を見させていただくと関係団体の取り組みの中でマイナスになっているのは6番だけであとはすべて上昇傾向にある。また6番についても実際はもっと行われているということで団体としては一生懸命活動していらっしゃるのだが一人一人に行き渡るまで少し時間がかかるのではないかという印象を受けた。

次に、他計画との整合性を保つということで関連計画との調和を図るというのは何か具体的なイメージがあるのかということをお教えいただきたい。

《事務局》

食の安全安心・食育推進計画については6次総合計画という市の大きな方針を決める計画があってその個別計画というところに位置づけられている。その総合計画の他に健康づくり推進課で所管している健康くまもと21という大きな健康増進計画がありその中で栄養の事にも触れられているので個別の計画とも整合性を図りながら、という意味合いで書いてある。ただ他の計画に影響を与えるような事は無かったため、大きな見直しは行っていない。

《田中会長》

14ページの“食に関心のある市民の割合”が若干下がっているがどの年代が下がっているというのは分かるのだろうか。

《事務局》

6歳以上ということで出しているのだからここでは分からないが、今後もっと細かく分析したものが出来上がるので次に推進会議を行うときには皆様にお配りできるようにしたい。

《田中会長》

アンケートの有効回収率のところを見ても15歳～64歳は40.4%と低いようである。

《事務局》

補足だが、この取り扱い注意としている市民アンケート結果は27年の8月末現在の速報値である。こちらで作っている案については最終的な確報値となっているので若干数値が違うところがある。

《田中会長》

これまでのところで何かご意見はないだろうか。

《小山委員》

私たちがこういった食育の問題をやっているのは市民が健康になるためにだが、その目的に沿ってやったことが結果としてどうだったのか。予算を組んで時間を作ってやっていて、果たして市民がどれだけ健康になったのかそういった評価が欲しいと思う。

朝食を食べているかどうかと聞いて、食べていると答えても何を食べてどれだけ健康になったということが分かるのならない。

この前発表があったが、高齢者の体力の機能が高まったということだった。予防医学をやっていてその立場から申し上げるとがんや糖尿病を始めとする生活習慣病は全部食源病である。介護予防についてはメタボリックシンドロームを解消するためにも高齢者に運動させるのは大事なことだが、病気ということで考えたらやはり食べものが重要である。それをもっと本気で考えてほしい。前にも申し上げたが沖縄は日本一の健康県だったのに30位に下がってしまい、さらに65歳未満で見ると日本一悪い。このことを沖縄の人に聞いてみるとアメリカ式食生活によってそうなったと言われる。

アメリカの人が言うにはかつての沖縄の食事が健康の基本だったということで、それをアメリカ人もしようとやったのが40年前の事だった。それがようやく実りだしてアメリカではがんも減っているし糖尿病も減っているが、逆に日本ではがんも糖尿病も増える一方

である。アメリカでは今野菜をたくさん食べようという動きになっていて、一人当たりの野菜の消費量は日本人よりはるかに多くなっている。このアンケートを見ても野菜を食べていますかという設問で1日2回以上という項目になっているが本当は毎食食べないといけない。そして肉と乳製品、砂糖を減らし、野菜や果物を食べるように、また穀類は精製していないものを食べるという方針を出した。アメリカは医療費が高いのでとにかく病気にならないようにしようという考えで検診率も非常に高い。乳がんの検診率は80%以上である。日本はとにかく関心が薄くて、病気になっても医者がいるからいいというような考えである。2025年になると後期高齢者が一気に増えて医療機関も介護施設も保険財政もパンクするのではないだろうか。そうしないためにもとにかく食べものをどうにかしなくてはいけない。この食育部会が一番責任のある部会だと思っている。もっと本気で考えて、これだけやったから熊本の医療費が減ったというようになると議会も説得できるし予算ももっと出してもらえるようになるだろう。コマ形のバランスガイドを知っていますかという質問でも、ほとんど知らないという回答で、知っていてもほとんど参考にしないと書いてある。中身についてはなんとなくまだ分かっていないのではないだろうか。日本もアメリカがやっている政策を真似して健康日本21をやっている。それがアメリカほど徹底していないのは医療機関が発達しすぎているからではないだろうか。食べものについて関心はあるのだろうがなにを食べればいいのか分からないのではないだろうか。

アメリカでは疾病が減ってきているというのは予想外の事で、日本ではがんも糖尿病も増えていて、糖尿病の結果CKDもどんどん出てきている。そのために人工透析をすることになって高い費用がかかってしまう。厚労省の発表では医療費が40兆円を超えたとの事だった。この原因はほとんど食べものであるということを考えないといけないということをアンケートの中に生かしながらみなさんに意識してもらえないかと思っている。

《田中会長》

たくさんの学生がいる中で朝食を食べない子もいるのだが、セルフモニタリングをさせた後、自分たちで朝食を作らせる実習をして再度セルフモニタリングをしたら中身が変わったりしてきて、自分たちで考えたことというのは定着するのだということを感じた。大人が気付いたことを本気になってひとつひとつやっていくことが大事だと思う。食事が大事だという本気度をもって当たり前のことを当たり前でできる人を増やすべく、それぞれの立場で頑張っていくしかないのではないだろうか。その中で問題点を共有しあって連携してやっていくことが必要だと思う。時間とお金とみなさんの英知を集めて成り立っているこの会議の成果が少しでも形になればと思った。

やることは地味だし、成果もすぐ上がるものではないが、10年後振りかえって見たときに何かを残せばいいと思う。

最後に議題3のその他についてなにかあれば事務局よりお願いしたい。

《事務局》

7月に開催した会議の中で北川委員から小学校の児童育成クラブでおやつを与えているが

コンビニやスーパーで買ったスナック菓子がほとんどであり、それを県の委託事業ということで試験的に和菓子を提供したこともあったのだがそういったことは今後試みることはないのかという意見をいただいた。実態がどうなのかということをごちらでも調べたのだが、やはりスナック菓子が多いということで市内の77の児童育成クラブを細かく見ていった方がいいのかと感じた。その中で食育に関心のある指導員の方がおられて予算に関しても許されれば提供させる側と受け入れる側のマッチングができるのではないだろうか。その前段ということで今アンケート調査を考えている。担当の青少年育成課と協働でアンケートを行い、今後の会議でお話できればいいと考えている。

もう一点、以前の会議の中で国が健康な食事につけるマークをいうものを紹介したのだが、本来であれば今年の4月くらいからコンビニやスーパーに並ぶお弁当に付けられるはずであった。600キロカロリー以下であったり、塩分が3%以下、主菜と副菜のバランスが良いものなどに付けられるはずであったが、貼っていないお弁当が逆に不健康に見えるということで国の方で話があり、シールの使用については無くなったという情報が入った。今後このマークは個別のお弁当に貼るのではなくバランスの良い食事を心がけましょうという象徴的な用途で使われるということである。